

歌神としての住吉明神

佐々木 孝 浩

禪竹作とされる『雨月』には、住吉明神が後シテとして登場する。謡曲の詞章を正しく鑑賞する為には、相当の和歌知識が不可欠だが、住吉明神登場の意味を理解する為には、和歌世界で同明神がどの様に認識されていたかを知る必要があるようである。

住吉神に関する資料は膨大だが、禪竹岳父の世阿弥と同じく、足利義満の寵遇を得て活躍した、公家歌人の飛鳥井雅縁(正長元年・1428)没・七一歳)が著した『和歌両神之事』(以下『両神』と略す)は、この時代の住吉明神観を窺うのに適した資料である。

京都大学所蔵の自筆本には、「此明神は神代の神」で、「神宮皇后年中」に「鬼病」(疫病力)の流行を静める為に、「諸神御談合」して「住吉の濱に鎮座」することとなり、その証として「松四本」が「涌出し」たとある。これは記紀等には見えない、「社家の説」だが、住吉社の象徴として和歌にも詠まれた、「住吉の松」の起源譚であると共に、祭神が四柱であることも暗示しているのである。

同書には、「第四の御殿は玉津嶋」とあるのみで、他の三神について言及はない。『雨月』を始め、『高砂』『白楽天』等の住吉明神が登場する謡曲では、必ず「西の海やあはきの浦のしほぢよりあらはれいでし住吉の神」との卜部兼直の歌(続古今集七二七)が引かれる。同歌は『日本書紀』の、伊弉諾尊が黄泉国から帰り、日向の小戸の橘の櫛原で禊をした際に、潮の中から底筒男命・中筒男命・表筒男命の住吉大神が生まれたとの記述を踏まえているが、この話は雅縁にも、常識と認識されていたのであろうか。

『日本書紀』はまた、この三神が神宮皇后の新羅征伐に功があり、その託宣通りに現在地(大阪市住吉区)に鎮座することになったと説く。注目されるのは、その託宣中で住吉明神が「往来ふ船を看(みそなは)さむ」と誓ったことである。確かに『万葉集』中の、遣唐使に贈られた長歌(四二四五)では、同明神に対して、帰国まで無事に船を導いてくれるよう願っており、住吉明神が海上交通の守護神として尊

崇されていたことが判るのである。

『両神』には、住吉明神は「和歌の道を御まもりの神」であるけれども、そうだったのは「ことあたらしき事」であると記されている。それでは、航海の神から歌神へと、その性格を変えたのは何時からであろうか。

住吉明神は古くより和歌と縁の深い神ではあった。『伊勢物語』第一百七段には、天皇が住吉に行幸した際に歌を詠み、「現形」した神が、「むつまじと君は白浪瑞垣の久しき世よりはひそめてき」との歌を返したことが見える。しかしながら、神詠が存するのは住吉神ばかりではなく、このことをもって和歌の守護神であると認定はできない。

住吉社が歌神に変貌を遂げたことは、先にも触れた第四殿が玉津島明神とされていることが関係するらしいのである。平安末の顕昭の『古今集序注』には、住吉社第三十九代神主の津守国基(康和四年・1102没・八〇歳)が、「住吉四社の中、其の一は衣通姫也。若浦玉津島明神と申す是也」と語ったことが見える。衣通姫は、『日本書紀』では允恭天皇妃とされ、「古今集仮名序」で、「小野小町は古の衣通姫の流なり」と記されたことから、女流歌人の祖的な存在として崇拜された伝説的な女性である。その衣通姫が若浦の社の祭神になったのは、「和歌」の浦との地名と無関係ではあるまい。本来的に歌神としての性格が濃厚な玉津島明神が、住吉にも鎮座していることが、

住吉が歌神として認識される契機になったのではないだろうか。

国基は、勅撰集への入集を願い、撰者に住吉の鱒を贈ったので、『後拾遺集』に「小鱒集」と綽名が付いたという(井蛙集)程に、和歌に執心した人物でもある。住吉が歌神として都人に認知されれば、その社家の公家歌壇における地位も上昇するはずである。社と自家の繁栄を願って、意図的に祭神の性格の付与がなされた可能性は高そうである。

『両神』には、第四社は「神宮皇后御一鉢」との社家の秘説も記される。確かに平安中期頃の『住吉大社神代記』には、第四宮は「氣息足姫皇后」即ち神宮皇后であると見える。同じ女神であることを梃子として、いささか強引にすり替えが行われたらしいのである。

しかしながら、玉津島が祭神に加わっただけでは、住吉の歌神化は完成しない。国基に先立つ赤染衛門の家集には、息拵周が住吉の崇りて病になつたので、回復を願ひ歌三首(五四一〜三)を記した弊を取つたのが見えて、病も癒いと白き翁が弊を取つたのが見えて、病も癒えたと記されている。住吉明神は白髭の老翁姿なのであり、女神ではないのである。『両神』にも、白樂天が日本人の才知の程を探るために来朝した際、釣をする老翁姿の住吉明神が、この国に「才芸ある事之次第」等を詳しく「演説」したので、樂天は恐れをなして帰国したとの、謡曲「白樂天」に似た説話や、日向か

肥前かにある「しらひげ明神」と住吉の同躰説が記されているように、基本的に住吉明神は老翁の姿で化現するものなのである。

実はこの姿こそが、住吉明神が完全な歌神へと変貌を遂げる為の重要な要素であつたらしい。やはり「古今集仮名序」で、「歌の聖」と讃えられた、万葉歌人の柿本人麿もまた、白髭の老翁姿として認識されていたことは、元永元年・1118の『柿本影供記』に明らかである。建久六年・1195に藤原俊成が記した「民部卿家歌合跋」には、「すべて歌の筵には、かけまくもかしこき住吉の御神もてらしのぞみ給ひ、道を守る人丸の卿のなきたまもかよひける」とある。住吉明神は国基等の社家の努力の甲斐あつてか、既に和歌守護神としての地位を獲得していることを示す記述だが、人麿との併記は、同じ姿による親近性が背景にあるのではないだろうか。

『玉伝神祕卷』に、「大明神老翁に形を現じて云、歌道を広めんために人丸に分身して侍り」等とある様に、中世期の古今集注や和歌秘伝書類には、人麿の住吉(特に第一社)化身説までもが見えるようになる。この説は『両神』には記されないが、舞台上の住吉明神に、人麿の姿をだぶらせて見ていた者も、少なくならなかつたものと思われる。

また鎌倉時代成立の歌学書『竹園抄』には、歌会の席には、「人丸を右に」、「高貴住吉大明神を左にかくべし」とあり、その影像が歌人達

に広まつていたことが判る。冷泉家所蔵の後柏原天皇着讃の室町中期のものは、能面にも似た表情だが、舞台上の造形に画像が意識されたこともあつたかもしれない。

ところで、『竹園抄』の「高貴住吉大明神」との呼称は、同明神の本地が高貴徳王菩薩であることに由来し、その説は「古今著聞集」(第一社とする)や秘伝書の『和歌無底抄』等にも見えている。『雨月』でも明神自らがそのことを語るが、当時の歌人でもあつた観客達には珍奇なことではなかつたはずである。

『両神』の住吉明神の記述末尾には、国基から、雅縁と同時代の国量・国貴兄弟に至るまでの津守氏略系図が存する。この頃に同氏歌人の勅撰入集歌集成である「津守和歌集」が編纂されたことが示すように、この系図は勅撰歌人の系譜としても見うるものである。

国基以下の津守氏の努力の成果は、諸資料から確認できる、歌道上達を願う歌人の参詣と奉納和歌の多さに明らかだが、能舞台における住吉明神の登場は、住吉信仰の隆盛の象徴であると共に、和歌の信仰と知識が能楽に与えた影響を象徴するものでもあるだろう。

(慶應義塾大学附属研究所斯道文庫助教授)

『両神』については小川剛生氏の御教示を得た。同書は松岡心平氏によって翻刻紹介の予定である。また最新の研究に、竹下豊氏「住吉の神の歌神化をめぐる」(『上方文化研究センター研究年報』大阪女子大学)1・平 12・3)がある。